

有り難かった昔のテレックス

IT 技術発展のお陰で、今では地球上どこにいても瞬時に交信することが可能になったが、その恩恵と有り難味はとかく忘れられがちになるものだ。

今月行われた総選挙の結果、漸く民主化の曙光が見えて来たビルマ(現ミャンマー)には、悲喜こもごもの懐かしい思い出がある。街でスマホを自由に使いこなしている若者たちを見ていると、つい 1970 年代初めビルマで散々こずらされた苦い思い出が、ふと甦って来る。

その当時ビルマの旅行市場はまだ未開発で日本人旅行者の姿はごくまれだったが、パイオニアとなってビルマ旅行を企画するに当り、旧ビルマ航空と国内便やホテル、バスなどの観光手配の業務契約を取り交わした。だが、40 余年前のビルマ・日本間の通信環境は劣悪だった。重要な手紙や書類は書留速達便扱いするようビルマ側から助言されたが、その速達郵便ですら 2 週間の時間を要した。

書留便郵送と同時に、重点事項だけでもいち早く確認しようとしてもそう簡単に電話がつながらなかった。ビルマ側に国際電話の回線数が極端に不足していたためである。電話は、予め日時を指定して国内の電話局へ時差を考慮のうえ、ビルマ航空と電話交信の予約をしなければならなかった。そうかと思うと突然ビルマ電話公社から、今なら回線が繋がるので直ぐ話せないか、と電話交信受諾の思いがけない催促があつたりして戸惑うことも多かった。今日のように E メールはもちろん、FAX も使えない時代に、どうしたら最も確実に早くメッセージを伝えられるだろうかと随分頭を悩ませたものである。

ある時何気なくテレックスはどうだろうかとおかしいビルマ人に尋ねてみた。彼はビルマの大企業には、大体テレックスの設備はある筈だと教えてくれた。そこで試みにテレックスで旅行手配を依頼してみたところ、驚いたことに万事スローペースのビルマからその翌日早々返信があつたのである。以後緊急連絡はすべてテレックスに切り替えたが、そこへ辿り着くまでに実に 3 年余の苦難の期間を費やしていた。

今やテレックスなんて知らない人も多いようだが、外国とのスピーディな交信に役立ち、業務遂行上大いに助けられた「通信遺産」テレックスには、今時のスマホなんかよりよほど有り難味を感じている。

(エッセイスト 近藤 節夫)